■橋梁新聞（2014年7月1日号　第2面）

リレー橋友録～私の橋歴書　「橋梁設計への思い」

（株）オリエンタルコンサルタンツ　SC事業本部　九州支店技術部次長　津崎博美

リレー橋友録　私の橋歴書

〈831〉

橋梁設計への思い

㈱オリエンタルコンサルタンツ
SC事業本部
九州支店技術部次長　津崎　博美

私が橋梁設計に関わり始めたのが平成6年で、早いもので今年は丁度20周年を迎える節目の年になる。

橋梁設計の魅力を一言で表すと、『1世紀以上残る建造物の計画ができること』であり、もう一つの魅力は、自分が頭の中で考えた構想や形が、現実に施工され出来上がり風景の一部になることだと思う。

自分の設計した橋を見ると達成感に満たされる部分と、出来上がりの相違に落胆し不満足な思いを残す部分、また、もう少し時間をかけることで、もっと良く出来たのではないかという悔やむ部分もある。多分、どれだけ時間をかけても、入念な検討をしたとしても、全て満足した100%の設計は死ぬまで出来ないのかもしれない。時間・予算の制約がある中で、どれだけ全力でその橋梁に思いを持った設計ができるかが、大きなカギになることは間違い無い。

しかし、橋梁設計は、傍目にからは一見華やかそうな仕事であるが、非常に地味な仕事である。設計は仮定、検証の繰り返し作業で、その上、鋼・コンクリート・土質・施工・道路・景観等の専門分野が多岐に渡り、非常に膨大な専門知識が広く深く求められる。その中において、自分の橋梁人生を支える橋に出会うことが何より大切なことではないかと思う。

私の一番印象に残る橋は、延岡市の大瀬川に計画した安賀多橋である。『橋の日（8月4日）』発祥の橋の架替えのため、60年もの長い間風景に溶け込み、地域に親しまれた旧橋に尊敬の意を込めて、『市民に愛され歴史を受け継ぐ橋』をコンセプトとして計画を行った。具体的には、上部工変断面形状による側面フォルムの相似性、金属溶射による桁の無彩色化、親柱の転用、壁高欄には建設当時と同様にのぞき窓を付け、バルコニーはスムーズな動線計画から反曲円を用いた。その後その橋が、戦時中の空襲を橋の下で逃れた地元の方々の思いから、『命の橋』として橋詰めに記念碑を贈呈されているのを知り、このような橋の架替えに携われたことが素直に嬉しく、一方ではこの仕事の重大さを改めて痛感した出来事でもある。

今までの橋梁人生を通してこれからの橋梁計画・設計のあり方を考えると、架橋位置にふさわしい橋梁とは何かを十分に考え、計画の根幹となるコンセプトを立案し、鋼・PCを自由自在・適材適所に使える設計による『コンセプト設計』が求められるのではないかと思っている。

私の尊敬するE.フレシネは『橋は人間の為したことの尺度ではなく、自然の偉大さの尺度である』と言っている。私は、自然の偉大さの中で風景との調和が図れる橋梁が何かを見つける姿勢が重要であり、その中でそれぞれの情熱、魂が入った橋梁設計をするのが使命であると信じている。橋梁に携わっている方々も各々の信念を持っていると思う。発注者、設計者、施工者の垣根を外してお互いの信念を認め合いぶつけ合いながら一緒に良い橋を架けていけたらこれ以上幸せなことは無い。

次のバトンは新構造時代の同僚で、現在は復建技術コンサルタントに在籍し東日本大震災の復興に尽力されている、今泉さんに託したいと思います。